

「田部家の語られ方」論文・補足資料 (2016年4月・教職大学院「授業デザイン論」)

■ 株小作

『国史大辞典』(吉川弘文館)では、竹安繁治が次のように株小作を説明している。「小作慣行の一つ。山陰地方とくに島根・鳥取両県下に多く見られた従属小作の一形態で、田畑のほか、宅地・住宅・役牛・原野・山林から、夫食・肥料・農具・種子に至るまでを一括貸与して小作させる慣行をいう。ときには建具をも貸与し、また牛舎の建設に補助を与える場合もある。起源は詳らかでないが、開墾の際の労働力不足に起因すると考えられている。新潟・三重・石川・兵庫諸県にも、軒前卸・移住小作・鬮卸などの名称で、類似の慣行があった。」

このような「従属小作」としての株小作という認識は、明治時代から大正時代にかけて次第に形成されてきたもので、地主と小作農が対等な契約関係を結ぶべきという前提から、封建的で従属的な慣行と否定的に捉えられてきた。しかし、現代的な公正さという点において決定的な難点があることは事実としても、こうした慣行が当たり前であった状況下では貧困世帯に対する一種の生活保護としての意味合いがあったことも看過すべきではない。また、山陰地方では一般的であった株小作制を、ことさらにたたら製鉄と結びつける見方も正しくないと思われる。

■ 永小作

もともとは近世において年季を定めずに土地を無期限に小作させる慣行をいい、普通小作も期間が二十年以上に及ぶ場合は永小作と認定された。永小作慣行においては、小作人は地主に対して分割所有権に近い、自律性の高い諸権利を有していた。

明治維新当時、小作地総面積の約二割が永小作地であったと推計されているが、地主に対する地券の発行によって永小作人の地位は低下した。また 1898 (明治 31) の明治民法では永小作権の存続期間を 50 年としたため、小作人の間で不満が生じた。小作争議をはじめその後も小作関係をめぐる争いが絶えなかったが、戦後の農地改革で永小作は自作農へと移行することになった。現在も法律上「永小作権」が残っているが、事実としてはほぼ消滅しているようである。

・竹安繁治「永小作」『国史大辞典』吉川弘文館、JapanKnowledge 版。

■ たたら・山内^{さんない}

たたら製鉄において高殿での操業に携わる労働者は、山内と呼ばれる地区で生活をしてきた。一般の農村とは切り離された、たたら製鉄業に特殊な制度としてしばしば言及されてきた存在である。

島根県教育委員会による調査報告書『菅谷鑪』(1968 年)では、次のように菅谷たたらにおける山内での生活が記述されている。

「たたらをしていた頃は、田部家の使用人として、山も土地・高殿・家もすべていっさいを貸し与えられて仕事をした。ほとんどの私有財産がない代わりに、家賃もいるわけではなく、高殿で働く者も、山で炭を焼く者も、手代の支配のもと、ただ働いていればよいし、

いわゆる「だんさんのおかげ」で生活していた。働きに応じて米や金をもらっていたのである。たたらが中止になったときも、やはり田部家の山仕事で生活していた。……それが昭和四〇年四月、制度が変わり、山子は山代として、山の借り賃を一枚手（一町歩）二年間で、七〜八万円を事務所に現金で前払いして炭を焼き、それを売って生活するようになった」（43頁）。

■ 講座派・労農派

1927年からほぼ10年間、マルクス主義経済学者・歴史学者によって日本資本主義論争と呼ばれる論争が展開された中で、「講座派」「労農派」と呼ばれる論陣が形成された。

講座派とは、野呂栄太郎を中心に編集され1932年（昭和7）から1933年にかけて岩波書店から刊行された『日本資本主義発達史講座』、とくに同講座所収の論文をまとめた山田盛太郎『日本資本主義分析』（1934）と平野義太郎『日本資本主義社会の機構』（1934）の説を信奉する理論家集団をいう。

労農派は、日本共産党およびその上部組織コミンテルンの現状分析や政治路線を批判し続けた社会主義者のグループであり、その名称は、山川均、猪俣津南雄、荒畑寒村などが中心となって1927年（昭和2）12月に創刊した雑誌『労農』に由来する。共産党と直接間接に結び付いていた講座派と違って、労農派は特定の政治組織との結び付きをもたないルーズなグループであった。

労農派的立場からの批判として、山田、平野の日本資本主義論に対しては向坂逸郎、高橋正雄、岡田宗司などが、羽仁五郎や服部之総の明治維新論やマニュファクチュア論に対しては土屋喬雄などが、さらに農業問題に関しては櫛田民蔵、小野道雄などが批判の論陣を張った。

講座派が日本資本主義の構造的特質をその軍事的半封建的特殊性に求め、とくに天皇制の絶対主義的性格と半封建的土地所有制を強調したのに対し、労農派は日本の資本主義的發展と天皇制のブルジョア君主制的性格を強調した。こうした対立は同時に、当面する日本の変革がブルジョア革命か社会主義革命かという党派の見解の相違でもあった。

1930年代前半の論壇をにぎわせた両派の華々しい論争は、それぞれの主要メンバーが、講座派は1936年に「コム・アカデミー事件」で、労農派は1937年および1938年に「人民戦線事件」で検挙されたため、論壇からは消えていったが、日本のマルクス主義者を二分した講座派・労農派の二つの流れとその対立とは、第二次世界大戦後にも引き継がれていった。

・山崎春成「講座派・労農派」『日本大百科全書』、JapanKnowledge版。

・青木孝平「日本資本主義論争」『現代社会学事典』弘文堂、2012年。

■ 俵国一（1872-1958）

明治から昭和時代にかけての鉄冶金学者。1872年浜田県那賀郡浜田（島根県浜田市）の生まれ。島根県立第二中学・松江中学を経て上京し、共立学校（のちの開成中学）・第一高等中学・帝国大学工科大学へと進み、同学採鉱冶金学科卒業後、フライベルク鉱山大学で鉄冶金学を修め、1902年東京帝国大学教授となった。

帝国学士院会員の他、日本鉄鋼協会・日本鉱業会各会長、日本工学会理事長などを歴任。

総合研究の推進者として知られ、わが国にはじめて大型金属顕微鏡を導入して金属組織学の確立につくしたほか、古来の砂鉄製錬法の実証的研究や日本刀の科学的研究などの諸業績がある。近代製鉄を導入した明治期に、たたら技術の喪失を憂慮した俵が、1898年に延べ2ヶ月をかけて広島・鳥取・島根の砂鉄精錬業を調査したその貴重な研究成果が『古来の砂鉄製錬法』である。1958年鎌倉市にて没。浜田市役所前に銅像が建つ。

- ・飯田賢一「俵国一」『国史大辞典』吉川弘文館、JapanKnowledge版。
- ・島根県立古代出雲歴史博物館編『たたら製鉄と近代の幕開け』2011年。

■ 小野武夫 (1883-1949)

大正・昭和時代前期の農学者。1883年日大分県大野郡百枝村に生まれる。大分県立農学校を卒業後、上京して農商務省に勤務のかたわら法政大学専門部政治科を1912年に卒業。翌年帝国農会に入って永小作慣行の調査にあたり、1920年農商務省に移って永小作慣行の本格的な調査に従事した。1925年東京帝国大学から農学博士の学位を授与。1926年法政大学経済学部講師に就任、1931年教授となる。

小野はその全生涯を日本の農村研究に捧げ、その業績には農業史・農村史に関するものと、現実の農村問題・農民運動を取り扱ったものがある。また、研究のかたわら蒐集した膨大な史料を『近世地方経済史料』『日本農民史料聚粹』『(徳川時代) 百姓一揆叢談』として刊行した功績も逸することはできない。

- ・今井林太郎「小野武夫」『国史大辞典』吉川弘文館、JapanKnowledge版。

■ 石黒忠篤 (1884-1960)

昭和時代の農林官僚、政治家。石黒忠^{ただのり}憲の長男として、東京に生まれる。1908年東京帝国大学法科大学卒。農商務省に入り、1914年から約一年間欧州留学後、農務局農政課長、同局小作課長に任ぜられ、小作慣行調査、小作調停法立案などに尽力する。その後、農林省農務・蚕糸各局長を歴任。1931年農林次官、1935年農村更生協会会長、1937年産業組合中央金庫理事長、1940年および1945年にそれぞれ第二次近衛内閣農林大臣、鈴木内閣農相大臣など、日本農政のトップリーダーとして活躍した。



1946年公職追放。解除後1952年参議院議員に当選、のち緑風会議員総会議長となる。憲法調査会委員、全国農民連合会・国際食糧農業会・農業労務者派米協議会および国際農友会各会長、全国農業会議所および全国農業協同組合中央会各理事など要職を歴任。1960年死去。

石黒は若い頃、トルストイに大きな影響を受けていたという。大正期より革新的な農政を志し、敗戦後の農地改革の際は、予想もできなかったことだと涙を流して喜んだという(ただしこのエピソードは小平による評伝にはみえない)。

- ・小平権一『石黒忠篤』時事通信社、1962年。
- ・成沢光「石黒忠篤」『国史大辞典』吉川弘文館、JapanKnowledge版。
- ・竹村民郎「地主制の動揺と農林官僚」長幸男・住谷一彦編『近代日本経済思想史I』有斐閣、1969年。
- ・画像：『日本人名大辞典』(JapanKnowledge版)

■ ^{じがた} 地方学と郷土会

農業を国の礎と考えていた新渡戸稲造（1862-1933）が、地方の文化や実情を把握する経世済民の学として提唱したのが地方学である。その実践として、新渡戸が柳田國男とともに 1909 年から開催したのが有名な郷土会である。郷土会には石黒忠篤の他、後に石黒の下で農政に携わる那須皓や有馬頼寧、それから小野武夫らが参加していた。

・芳賀登『地方史の思想』（NHK 出版、1972 年）

■ 山田盛太郎（1897-1980）

愛知県生まれ。東大卒、1925 年東大経済学部助教授。日本資本主義論争における講座派の理論的指導者。1931 年「再生産過程表式分析序説」を著し、資本主義分析の方法を提起して一躍著名になり、1934 年『日本資本主義分析』を上梓。その論旨は、日本資本主義の再生産的分析を図ったもので、農業を再生産の基盤とし軍事型重工業を基軸として、綿業・絹業が編成されるという構造が産業革命を通じて成立し、その後の日本資本主義発展の型を規定した、というものであった。

・『岩波日本史辞典』（岩波書店、1999 年）